

9 慢性期頸髄損傷者への長期的なリハビリテーション介入による ADL の変化 —FIM と SCIM を用いた後方視的研究—

自立支援局 第二自立訓練部 肢体機能訓練課 瀧本一真、池田竜士
病院 リハビリテーション部 再生医療リハビリテーション室 島袋尚紀、愛知諒

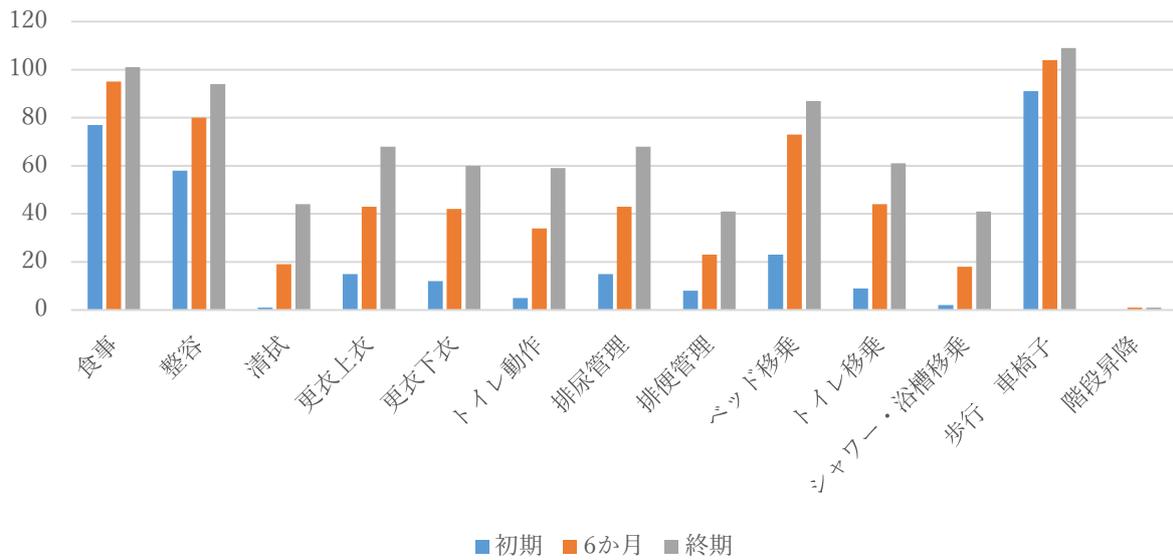
【目的】 自立訓練（機能訓練）では、慢性期の頸髄損傷者を主な対象に機能訓練サービスを提供している。慢性期頸髄損傷者へのリハビリテーション介入による FIM や SCIM を用いての ADL 変化の報告は少ない。そこで今回、慢性期頸髄損傷者への長期的なリハビリテーションにより、ADL にどのような変化を生じたかを報告する。

【方法】 当センター自立支援局（障害者支援施設）を利用した 2016 年 1 月 1 日から 2023 年 12 月 31 日までに利用終了した 229 名から評価期間を抽出できる頸髄損傷者 130 名（受傷後経過日数 503.9 ± 333.9 日）を対象に、カルテより後方視的に調査した。評価期間は利用開始時、中間（6 カ月時）、利用終了時とし、調査項目は基本情報、医学的情報、利用期間、ADL 評価項目は FIM・SCIM とした。本発表は当センター倫理審査委員会の審査において承認を得て実施している（承認番号 2024-008）。

【結果】 対象者の内訳は男性 116 名、女性 14 名、平均年齢 37.9 ± 13.8 歳、平均利用期間 406.9 ± 118.5 日、AIS の内訳は A：49 名、B：35 名、C：40 名、D：6 名であった。利用開始時から利用終了時までの ADL 変化は、FIM 合計は 16.7 ± 14.6 点、SCIM 合計は 13.3 ± 11.3 点の上昇を認めた。FIM 下位項目においては更衣上衣、トイレ動作、ベッド・トイレ移乗、シャワー・浴槽移乗等で自立者の増加を認め、SCIM 下位項目においては自動車移乗等で自立者の増加を認めた。

【考察】 本研究では、慢性期頸髄損傷者に対して医療リハビリテーションが終了した後に 1 年程度の長期間のリハビリテーションを行うことが有効であると示唆される。頸髄損傷者に対しての入浴やトイレの環境は多くの病院で導入されていない環境であり、ベッド・トイレ・浴室移乗、トイレ動作の諸動作で変化がみられた点に関しては、頸髄損傷の病態に合わせた特殊環境でのリハビリテーションの必要性が考えられる。

FIM 自立者数 (人) n=130



SCIM 自立者数 (人) n=130

